

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	新山順子
2. 審査委員	主査：岡山大学教授 高橋敏之 副主査：兵庫教育大学教授 名須川知子 委員：岡山大学教授 西山修 委員：鳴門教育大学教授 田村隆宏 委員：岡山大学准教授 吉利宗久
3. 論文題目	保育者養成における人との関わりから展開する即興的な身体表現の実践
4. 審査結果の要旨	<p>先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 新山順子 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成27年2月11日（水） 14時00分～14時30分</p> <p>場所：岡山大学教育学部東棟3階1308室</p> <p><b>1. 学位論文の構成と概要</b></p> <p>第1章 問題の所在と課題の明確化</p> <p>第1節 研究の背景と問題の所在</p> <p>第2節 保育者養成における身体表現教育に関する研究の動向</p> <p>第3節 研究の方法と内容構成</p> <p>第2章 幼児教育における身体表現の位置付けと発達の理解</p> <p>第1節 『幼稚園教育要領』における身体表現の取り扱いの変遷</p> <p>第2節 幼児の身体表現に見られる題材と動きの関係</p> <p>第3節 幼児の身体表現に見られるイメージと動きの関係</p> <p>第3章 人との関わりから展開する即興的な身体表現の授業</p> <p>第1節 身体表現の授業実践の概要</p> <p>第2節 保育者として相応しい身体を養成する身体表現の実践</p> <p>第3節 即興表現の授業実践と学びの特性</p> <p>第4節 地域の障害児と交流する身体表現の実践</p> <p>第5節 授業の学びと保育実践への有用性</p> <p>第4章 研究の総括と今後の課題</p> <p>第1節 幼児期の身体表現の充実に向けて</p> <p>第2節 保育者養成における身体表現教育の可能性</p> <p>第3節 身体表現の教育課程の深化</p> <p>第4節 身体表現の授業実践力の向上</p> <p>引用文献</p>

社会の変動を背景に、現代の保育者には一層高い資質・力量が求められている。養成機関においては、複雑な社会状況に対応できる質の高い保育者を輩出する使命を持つ。保育者の養成教育は非常に重要であり、現代の保育の本質や保育者の専門性を踏まえた教育課程の見直しは不可欠である。しかしながら、保育者養成においては、担当教員の専門性により様々な授業が行われているのが現状である。そこで、本論では、保育者養成における身体表現の授業に特に着目し、他者と交流しながら即興的に動きを創出する「即興表現」を導入した授業を実践し、その価値を検証する。また、それらを踏まえて保育者養成の新しい身体表現教育の在り方を提示する。

第1章では、現代の保育者や幼児を取り巻く状況を整理した上で、特に身体表現の領域に着目して保育者養成の問題点を指摘し、課題を明確化した。また、本論の主題に関連する先行研究を概観し、研究の目的、方法及び内容構成を示した。

第2章では、幼児教育における身体表現の歴史の変遷について論述した。また、幼児の身体表現の発達に関する理解を深めるために、実際に幼児の身体表現を観察して、動きの現れ方や発達の特性について述べた。第1節では、戦後に刊行された『幼稚園教育要領』等を分析し、身体表現的な内容が、「遊戯」から「音楽リズム」「表現」へ名称を変えながら、幼児教育の重要な内容として位置付けられてきたことを明らかにした。第2節では、幼児を対象に8種の題材による動きの観察を行い、題材による動きの現れ方を分析・考察した。幼児の身体表現においては、「走る」運動や「跳ぶ」「ギャロップ」等の運動が頻繁に見られ、空間を広げる重要な手段と捉えられた。第3節では、特定の題材（「風船」）のイメージと動きの関係に着目して、質的に分析・考察を行った。この題材においては、加齢に伴って動きのイメージの固定化が見られ、援助にも工夫が求められることが確認された。

第3章では、保育者養成において、仲間と交流しながら即興的に動きを創出する「即興表現」を導入した身体表現の授業を構想・実践し、その教育的価値を検証した。第1節では、即興と交流に価値を置く授業の特徴と概要を提示した。第2節では、最も即興性の高い授業を対象に、受講生の内省を収集し、身体的なコミュニケーションの様相について質的分析・考察を行った。受講生は多様な表現の体験により、新しい身体的な気付きを得ることが確認された。第3節では、身体表現の授業全7回分を対象に、受講生の内省を収集して、学生の学びの特性を明らかにした。内省の量的・質的分析から「動きながら学ぶ」授業としての特性が浮かび上がり、仲間との交流でより深められるということが明らかになった。第4節では、地域の障害児と保育者志望学生との交流の実践を対象に、学生の学びの過程や学びの様相を明らかにした。第5節では、保育者養成における身体表現の授業の学びが保育実践に有用であるかについて、保育職に従事した卒業生への追跡調査により検討した。その結果、「自己の身体表現経験の再現」、「表現に対する自己の在り方の変容」等を含めた4つの枠組みに整理して有用性を確認することができた。

第4章では、本研究の主要部分である第2章と第3章の研究成果を総括して、今後の課題を示した。保育者養成における身体表現の授業の実践と検証については、授業改善の方法等についても考察を深めた。保育者養成の教育課程においては、障害児の遊びの指導法について課題があり、今後も新しい実践の試行や研究を推進する必要性を論じた。また、大学在学中に身体表現の授業を受講し、保育職に従事した卒業生への追跡調査についても総括し、高度専門職としての養成教育の実践と研究の深化について述べた。最後に、身体表現の授業実践力の向上について、保育者養成の教育課程における他科目との連携、教養教育との連携、大学教員のための研修の必要性の観点から考察し、提案を行った。

## 2. 審査経過

本論文の主要部分は、4編の査読付き学術論文として『保育学研究』（第一著者、日本保育学会誌2003・2014）、『運動・健康教育研究』（第一著者、日本幼少児健康教育学会誌2013）、『教育実践学論集』（第一著者、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科2014）に掲載され、学術的評価を得ている。5名の審査委員が留意して討議した諸点は、以下の通りである。

### (1) 研究目的と論文構成の整合性について

本論文は、保育者養成における身体表現の授業を対象として、他者と交流しながら即興的に動きを創出する即興表現を導入した授業を実践し、保育者養成の新しい身体表現教育の在り方を提示することを主要な目的としている。論文構成は、先行研究概観による問題の明示と幼児期の身体表現に関する基礎的な理解を基盤として、保育者養成における身体表現の授業実践を多様な視点から分析、考察する流れである。したがって、研究目的に整合する妥当な論文構成になっている。

### (2) 先行研究の概観と考察に使用された資料の扱いについて

本論文は、複数の学問領域に関わる研究と言える。先行研究の概観では、保育学を中心に、舞踊学、哲学、芸術学、教育学等、幅広い研究を概観した上で、特に重要な「即興」「身体」「授業実践」の3つの視点について課題を整理し、本論文の位置づけを明示している。考察に使用した主要な資料は、毎回の授業の受講生の内省等を独自に収集したものであり、倫理的配慮に十分留意して取り扱っている。よって、研究資料の質・量、扱い方共に、学位論文の水準にあると判断できる。

### (3) 分析と考察における客観性及び論理的な文章表現について

分析、考察共に総じて、主観的恣意的な記述を排除し、科学的な解釈や論理的な文章表現への配慮が認められる。分析では、質的分析に加えて、KHCoderを活用した量的分析により図表を作成して客観的な分析に努めており、研究の再現性、妥当性、信頼性を高めている。また考察では、先行研究や関連領域の知見を引用しながら、筋道を立てて論考を進めている。論の運び方は明快であり、得られた結果から、納得がいく合理的な結論を導くことができている。

### (4) 教育実践学の学位論文としての独創性及び発展性について

社会の変化に伴い、保育者の役割や責任は増しているが、保育者養成の授業を対象とした実践研究はあまり推進されていない。本論文は、即興を重視した授業の実践と検証により、保育者として相応しい身体や動きが、身体表現の授業で養成される可能性を示唆している。授業実践研究として意義深く、保育者養成における身体表現の授業の1つのモデルを提示していると言える。よって、教育実践学の観点から独創性に長けており、今後の研究の発展が期待される。

### (5) 学位に学校教育学を付記する根拠としての学校教育実践への貢献について

大学教育では、授業改善や教員の資質向上が大きな課題となっている。本論文は、保育者養成における専門科目を対象に授業実践研究を行い、詳細な分析をふまえて、授業改善の視点や課題を示している。これらは、大学における専門職養成教育の在り方を再考する上での、資料として有用であり、現在大学教育に期待されるActive Learningの先行的な実践と言える。以上により、学校教育実践へ貢献する成果と認められ、学校教育学の推進とその方法の確立に寄与する論文と言える。

## 3. 審査結果

以上により本審査委員会は、新山順子の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。